

聖書:使徒の働き19章1～10節

説教:主イエスの名によって

はじめに

私たちは祈りの最後にこのように言います。「主イエスの名によって祈ります。」「主イエスの名を通して御前におささげします。」英語で祈る方は、in name of Jesusと言います。どんな祈りでも「イエスの名前」ということばを必ず使います。教会に初めて来られた方は、私もそうでしたが、どうして決まり文句のように「イエスの名によって」と言って祈るのか、疑問を覚えたものですが、なんとなくほかの人に尋ねるのも気が引けてそのままになり、そのうち時間が経つうちに考えることもなくなりました。しかしあらためて考えると、どうして「主イエスの名によって」と言うのかという疑問がわきます。ヨハネの福音書14章に「わたしの名によって求めるなら、わたしはそれをします」とあるので、それが根拠とも言えます。今日の所でもパウロがエペソにいた十二人ほどの弟子たちに「主イエスの名によって」バプテスマを授けたとあります。イエスの名によって求める、祈るのはどんな意味があるのか。主イエスの名前と私たちにどんなかわりがあるのか。きょうはバプテスマというところから、考えてまいります。

1 ヨハネのバプテスマ

1) 動機：罪の悔い改め

前回、エペソの町にやってきたアポロという人を取り上げました。ヨハネのバプテスマしか知らなかったアポロでしたが、プリスキラとアキラから神の道をもっと正確に教えてもらいました。神の道とは、イエスの名によるバプテスマのことで、それが今日の所にも出てきます。そのアポロがエペソの教会から送り出され、エーゲ海を渡って対岸にあるコリントに行ってもなく、パウロがエペソの教会に入れ替わるようにやってきて、何人かの弟子たちに出会ったことから今日の話がはじまります。2節から4節を読みます。「彼らに「信じたとき、聖霊を受けましたか」と尋ねると、彼らは「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたことはありません」と答えた。「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」と尋ねると、彼らは「ヨハネのバプテスマです」と答えた。そこでパウロは言った。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」「

これを読んでみなさん、気がついたと思います。バプテスマには二つの種類があるらしい。一つはヨハネのバプテスマ、もう一つはイエスのバプテスマ。この違いはなんだろうか。私はどっちのバプテスマを受けたのか。そこでまず「ヨハネのバプテスマ」とはなにかから見ていきましょう。三つのポイントで整理します。まず最初は、ヨハネのバプテスマを受ける動機です。パウロが言っています。「悔い改めのバプテスマ」。罪を悔い改める者が神の前にへりくだる。それがヨハネのバプテスマを受ける動機です。

2) 手段：水でバプテスマを授けた

二つ目。ヨハネのバプテスマはどのような方法で、つまり手段で行ったか。ヨルダン川の水にからだを沈めて行います。私がイスラエルに行ったとき実際に見たのですが、わざわざ海外からツアーを組んでイスラエルに来て、ヨルダン川で洗礼式をしている団体がありました。念のために言いますと、ヨルダン川の水だからなにか特別な力があるとかそういうことはありません。聖書に書かれていることを体験するという趣旨でやっているのでしょうか。教会のお風呂で水道の水にからだを沈めてもまったく同じです。

3) 目的：イエスを信じるように

三つ目。ヨハネのバプテスマはどのような目的で行うのか。4節でパウロが言っています。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」ヨハネの後に来られる方、すなわち主イエスを信じるため、そのためにヨハネは水でバプテスマを授けた。これが目的です。

2 パウロが授けたバプテスマ

1) 動機：イエスを信じるため

ヨハネのバプテスマについて三つのポイントで整理しました。では、パウロが行ったバプテスマはどんなものであったのか。比較できるように同じく三つのポイントで整理してみましょう。まず一つ目。動機です。これは先ほどのヨハネのバプテスマとつながります。ヨハネは、イエスを信じるという目的でバプテスマを授けたました。ですから、パ

ウロが行ったバプテスマは、イエスを信じたいという動機があって初めて受けられることになります。

2) 手段：主イエスの名によって

二つ目のポイント。どのような手段でバプテスマを行うのか。ヨハネの場合は水を使いました。しかしパウロは水ではなく、主イエスの名によってバプテスマを授けます。もう一つ付け加えるなら、パウロは彼らの上に手を置いたとあります。手を置いて、主イエスの名によってバプテスマを授けると宣言した。

ここまで聞いて、みなさんは考えたかもしれません。教会でしている洗礼式と、ここに書いてあるバプテスマと同じなのか、結論から言えば、教会のバプテスマは、ヨハネのバプテスマと、パウロが授けたバプテスマを一緒に行っています。どういうことか。一つ目。洗礼式のとき、証しを読んでいただきます。ご自分の罪を告白し、この人は確かに主イエスを信じたいと願っていると神と教会の前で、確認します。そうしてから、水にからだを沈める。これはヨハネのバプテスマに該当します。二つ目。牧師は洗礼を受ける兄弟または姉妹の頭に手を置いてこう宣言します。「父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授ける。」これがパウロが授けたバプテスマに該当します。聖書に書かれているのと教会で行っているバプテスマ、当然ですがまったく一緒です。

3) 目的：信じて聖霊をいただく

さて、パウロが授けたバプテスマに戻ります。三つ目。目的は何かです。これはパウロが語っている。もう一度2節前半を読みます。「信じたとき、聖霊を受けましたか。」この人たちは、「弟子たち」と言われているので、イエス・キリストを信じていたことは間違いなかった。ところが、信じたら聖霊を受けることは聞いたことがないと言うし、様子を見ていても聖霊をまだ受けていないことは明らかでした。そこでパウロがあらためて主のイエスの名によってバプテスマを授けたということです。そうしてパウロが手を置いて祈ると、すぐに聖霊が臨んで異言を語ったり、預言をはじめました。

これを読んで、いったい何だろうかと戸惑います。ここに書かれているようなことは、今はほとんど見ることはありません。もちろん、全くないわけではない。少数ですがあるグループは、異言を語ることができて初めてクリスチャンとして認められる。そういう立場をとる人たちもいます。私たちは

そのような極端な立場をとりません。みなさんもそうでしょうが、私も異言は語れませんし預言もできない。それでも問題ない。

それはよいとして、ではこの箇所をどう理解するのか。こんな説明がされます。使徒の働き時代は聖霊が活発に働いていて、そのことが目に見える形で現れることが多かった。今は、もちろん聖霊はまったく同じように働いておられるけれど、その働きが目立たなくなっただけ。福音的な立場に立つ教会はだいたいこの考えをとっています。

目に見える驚くようなことはあまり起きませんから、ときどき「私に聖霊はおられるのだろうか」と不安に思うことはあるでしょう。でも私はいつも思っています。ここはまさに聖霊が働いておられる主の教会である。そのことは自信をもって言うことができます。

3 主イエスの名によって

1) ここにおられない方の名を呼ぶ

パウロはこのように「主イエスの名によって」バプテスマを授けました。さて、ではどうして「主イエスの名によって」だったのか。そのことにはまだ触れておりません。今日は、この方の名を呼ぶことの意味について二つ挙げます。一つ目。学校の入学式を思い出してください。入学しといえ必ず来賓あいさつがあります。一番多いのは、市の教育委員長が招かれるというケースでしょう。札幌のように大きな都市になると、入学式が同じ日に行われたりすると全部出るわけにはいかない。それでどうするかというと、自分が行けない代わりに、たとえば副委員長とか委員会の関係者をよこして、「〇〇委員長の代理としてあいさつをさせていただきます」と言います。本人はいなくても、委員長の名前を語ることで委員長が来たのと同じ扱いになる。名前というのはそのような力を持っている。

「主イエスの名によって」というのはそれとよく似ている。よみがえられたイエス・キリストは弟子たちが見ている前で天に上げられ、今は父なる神の右の座に座っておられます。ですから私たちはイエスの姿を見ることがない。ここにいない、不在ということです。では、いないのでなにもできないのかというとそうではない。いないけれども、主はこの世界を御支配してくださっている。そのことを認め、すべてをゆだねて祈る。それが「イエスの名によって」という意味になります。

2) 名を呼んで祈ることの恵み

でもなぜ主イエスなのでしょう。いうまでもありません。この方が、私たちを罪から救ってくださったからです。そのためにご自身のいのちを十字架でなげうってくださいましたから。罪ある者が、主イエスよと呼んで、自由にいのることができる。考えてみれば大変な恵みです。祈ることも知りませんでした。祈りたくても誰に祈ってよいのかも分からなかった。それが今、祈る方を私たちは知っています。何もできないけれど、祈ることだけはできる。そのような恵みの中に置かれていることを覚え、またこの一週間も主イエスとともに歩んでまいります。